

平成二十六年 度 弘前大学卒業論文

夏目漱石『明暗』論 — 愛の行方 —

人文学部人間文化課程アジア文化コース

日本近現代文学ゼミナール

一一H一〇〇三 赤平茉史

# 目次

第一章	はじめに	1
一、	『明暗』について	1
二、	先行研究	2
三、	本論の目的	4
第二章	『明暗』の時代	4
第三章	お延のプライド	9
第四章	愛と憐れみ	14
一、	金銭をめぐる	14
二、	「眼」の輝き	15
三、	軽蔑と同情	17
第五章	おわりに	20
注釈／参考文献		21

## 第一章 はじめに

### 一、『明暗』について

『明暗』は、夏目漱石最後にして最大の長編小説であり、著者の死により未完となった。大正五年（一九一六）五月二十六日から「東京朝日新聞」（同年十二月十四日迄）と「大阪朝日新聞」（同年十二月二十七日迄）で、全百八十八回にわたって連載された。単行本の初版は、大正六年（一九一七）一月二十六日、岩波書店から刊行された。本文末には「作者は此章を大正五年十一月二十一日の午前中に書き終つたが、其翌日から発病して、十二月九日終に逝く。斯くして此作は永遠に未完のまゝ残つたのである」と付言されている。

修善寺の大患以降引き続いての病気に悩まされる中、漱石は午前中を執筆時間と定めて少しずつ『明暗』を書き進めた。夏には「何だか馬鹿に長くなりさうで弱ります」（八月十五日、久保頼江宛書簡）と言いつつも、「長い夏の日を芸術的な労力で暮らすのはそれ自身に於て甚だ好い心持なのです」（八月五日、和辻哲郎宛書簡）と、執筆の喜びを語っている。とはいへ「毎日百回近くもあんな事を書いてゐると大いに俗了された心持になり」、「午後の日課として漢詩を作るようにもなった」（八月十二日、久米正雄・芥川龍之介宛書簡）。漱石は大正五年十二月九日夕刻、胃潰瘍の悪化により逝去した。享年五十。

『明暗』は近代日本の資本主義の発展にともなつて都市化が進み、新中間層（サラリーマン・ホワイトカラー）という都市生活者が家族主義イデオロギーと近代家族という家族形態の生成の狭間で出現してくる「大正五年の潮流」（『点頭録』）を背景として描かれた小説である。これまで漱石が主題としてきた、金銭、社会、家族、愛、我執、孤独、自然、身体、意識、病、都市等が構造的に取り込まれており、漱石文学の集大成と言つてもよい。非常にポリフォニック（多声的）な作品であり、登場人物それぞれが独自の意識を有し、作者の干渉を受けずに自由に行動する。とりわけ女性がはつきりとした意思を持って動き回る点は、今までの漱石作品と大きく異なる特徴である。対象を相対的に把握する表現手法と、プロットを重層的に積み上げた緻密な小説構造が高く評価される作品である。

### 二、先行研究

『明暗』研究史には大きく三つの流れがある。この作品は長い間（則天去私）との関係から論じられることが多かった。則天去私とは漱石の最晩年の心境または覚悟として伝聞されてきた言葉だが、漱石自身が語った文献は存在せず、この語の内実については全て門下生の断片的な証言に拠るのみである。

この則天去私を『明暗』の理念と考えたのが第一の流れであり、代表的な論者は小宮豊隆氏、唐木順三氏である。小宮氏は「津田の精神上的の病氣」が「根本的の手術」を受けるといふ予想を立て（注1）、唐木氏は『明暗』は津田の精神更生記」だとした（注2）。こうした説では則天去私の体現者としての清子の聖女性が強調され、彼女が津田のエゴイズムという人格上の病を救済する、と論じられていた。

これに対する第二の流れとして、猪野謙二氏や江藤淳氏によって提出された有力な反論が挙げられる。戦後の思想を代表する立場であり、お延や津田に「個人」の成立を読んでいる。猪野氏は理性や意思を蹂躪する「暗い不可思議な力」の根源に、生を志向する強烈な自我意識としての「人間活力」を読み取った(注3)。江藤氏は、清子聖女説を強く否定し、小林の視点と作者の視点を重ね「作者の視点は、この小説の中で「自然」と「社会」の間を微妙に振動している。このことは「則天去私」の注釈などよりはるかに重大なこと」であると述べた(注4)。このような反論により、現在では則天去私との短絡説はほぼ退けられたとみてよいだろう。ただし則天去私の再評価として、則天去私抜きにしては『明暗』の成立は無かったとする、駒尺喜美氏の論も注目される(注5)。

このような「個人」を単位とした論に対して、「関係」に重きを置く第三の流れが生まれた。平野謙氏は徹底して「永久に悪循環」を繰り返す「夫婦関係」と、「錯綜」する「人間関係」こそがテーマだと説いた(注6)。内田道雄氏は『明暗』のテーマを「家」と「人間の生命」との葛藤に見ている(注7)。また内田氏は、「僕は『明暗』の主題は結局、夫婦間の愛、に帰すると考える。一個の家庭が、当事者の自覚的な愛によって築かれうるものかどうか。つまり夫は家庭における愛によって自己を満たしうるかいなか、妻はその愛によって夫を家庭に近づきとめうるか否か」とも述べ、津田がもし救われるとしたらお延によってでしかないと言った(注8)。小泉浩一郎氏は、大正期ブルジョア社会のもろもろの外的〈関係〉から〈個〉と〈個〉としての津田―お延の〈関係〉、二人の愛という〈関係〉が自立可能かの成否を問うことに主題を見出した。ここには「故なく他を損ふもの」としての吉川夫人に対する戦いのモチーフが示されており、夫人と対立する「勇氣」を持ち、津田との愛に主体を賭けたお延のみが津田の救済者たる資格を持ち得る、と内田氏と同様の立場から独自の意見を述べた(注9)。

その後、主に道徳面から論じられてきた則天去私を表現方法として捉える論も現れた。高木文雄氏は則天去私を漱石が晩年に把握した文学理論として理解し、「語り手」という作品の表現主体を設定して作品を分析した(注10)。相原和邦氏(注11)、秋山公男氏(注12)は、『明暗』を「相対把握」の完成された小説として評価した。これらの論考に対し石原千秋は「こうした論考は「則天去私」神話の持つ道徳臭をそのまま表現の分析に持ち込んだにすぎない」と、則天去私をふまえた表現分析の限界を指摘している(注13)。

重松泰雄氏によれば、漱石は自己の卑小な分身である津田に「暗い不可思議な力」を突きつけることで矛盾した存在としての人間を認めさせるとした(注14)。藤沢り氏は考察対象を百七十一章以降に限定し、津田と清子の再会を漱石の過去作品と絡めて分析した。津田は過去作品の主人公たちのように、出会いがもたらした「不可知な世界」と孤独な対話を試みるしかないと言った(注15)。三好行雄氏は、『明暗』が、「非日常」の「明暗双々」の「相対性」のただ中に津田を放置していることを重視した(注16)。「相対化」はこの時期の論のキーワードとなる。藤沢論、三好論は、津田の温泉行き以降をそれ以前とは別世界での展開とみる点で共通しており、こうした見方は以後かなり定着することになった。

その一例としては玉井敬之氏の論があげられる(注17)。

『明暗』論のもうひとつの特色は、語られなかった結末の予想がされることである。この予想は昭和六十年代頃からかなり具体的になる。大岡昇平氏の論では、結末部に急激なカタストロフの到来を予測し、「お延の突然の変心」により彼女の心は津田から離れ、津田は清子とお延、二人の女の「変心」によって罰せられる、とした(注18)。また、水村美苗氏の『續明暗』(注19)は、漱石の文体をまね、それまでの漱石作品から引用を重ねて『明暗』を完結させる試みであった。

「家族論」の枠組みから作品を論じたのが石原千秋氏である。『明暗』は「道徳律として個人の内面までを拘束する〈家族制度〉」を「脱」構築してしまう」と説いた(注20)。小森陽一氏は、『明暗』は「穴」を埋める言葉の運動であるとし、「資本主義的な交換価値の論理」に生きる個人が、「自分の存在を評価しようとすれば、他の個人の運命と「比較」するしか術がない」と述べた(注21)。イギリスの女流作家ジェーン・オースティンの『Pride and Prejudice (高慢と偏見)』との比較を試みる論はいくつかあるが、その中でも佐々木充氏は、漱石はオースティンの「私」のない「態度」と「方法」を批判的に撰取し、『明暗』を「則天去私」の「態度」で書いているのであって、「則天去私」という境地をそこに造り出そうとしたのではないと説いた。また、漱石の各作品から「Pride系」「Prejudice系」の語を抽出し、『明暗』は「漱石作品随一の pride and prejudice の物語」であり、『高慢と偏見』と『明暗』の対照点は「漱石の意識的な反措定といつてよい」のだと評した(注22)。

本論では則天去私について言及すること及び結末の予想は基本的に避けることとする。後年の回想しか残されていない状況でのこれ以上の理解には限界があると思われる。そして研究史を一望しても分かれるとおり、則天去私は『明暗』論の中心となってきた概念であり、あえて新しく論じる必要を感じないためである。また、作品として魅力的であるがゆえに読者として結末の予想をする欲求が惹起されるのは自然なことだが、「テキスト自体がどのようにでも動きうる流動性を内包して(注23)」いるために予想は予想にすぎない。ここでは未完であることにとらわれず、現にある『明暗』を解釈していきたいと思う。

### 三、本論の目的

私は佐々木氏と同様「pride and prejudice の物語」として作品を読んだ。『明暗』において Pride と Prejudice というモチーフが物語の骨格を為していることは、佐々木論のほか多くの論の前提理解となっており、私はその延長線上にある〈軽蔑〉というキーワードを見落とすことがあってはならないと考える。〈軽蔑〉とは己を尊く考える故のものである。例えば「器量望みで貰はれた」お秀に嫉妬するお延は、お秀が「本当に愛の実体を認めた事」がないと分かると彼女を「冷笑」し「軽蔑」の態度で眺める。容姿の劣等感を刺激されたお延は、自信のある「愛」の領域にお秀を引き寄せ優越感に浸ったのだ。このように Pride と〈軽蔑〉は密接に関わっていることが分かるであろう。だから

こそ「愛」を *Pride* の側面から見た時に〈軽蔑〉を度外視することは出来ないのである。本論の最大の目的は、津田夫婦の「愛の戦争」を見取り図に起こすことである。この問いは「個」と「個」としての津田―お延の〈関係〉を重視する小泉氏の立場に準ずるものである。本論では最終的に〈軽蔑〉というキーワードを手がかりに、津田とお延の「愛」という関係の世界が *Pride* をめぐってどのような構造を為しているのかを解き明かすことに挑戦する。

## 第二章 『明暗』の時代

『明暗』は夫婦の間の愛を主題とした小説である。日本近代社会において男と女という性に夫と妻という役割が与えられたとき、つまり、恋愛を経て結婚し夫婦となった場合に、その男女の関係はどう変わるのかという問題が描かれている。この問題には当時の社会の常識や制度が深く関わっていると思われるため、まずは小説の舞台となる大正初期が男女にとって一体どのような時代であったのかを整理していく。そのうえで、漱石の作品において男女の関係がどのような変遷をたどることになったかを分析する。

そもそも男女の関係に「愛」や「恋愛」という言葉が用いられるようになったのは明治時代のことである。英語の (romantic) love を翻訳したもので、元を辿ればキリスト教の「アガペー」にさかのぼる。しかし仏教では「愛」は「渴愛」といわれ、欲望や執着といった苦悩の元になるものを指した。そのため、日本ではどちらかと言えば否定的なニュアンスを含んだ言葉だと捉えられていた。この点について佐伯順子氏は『色』という言葉が『肉慾』や容色という狭い意味に限定され、その対極にある精神的関係を表現するために、『愛』『恋愛』という言葉が持ち出されている」と述べている(注24)。新語の「愛」からは性的意味合いが排除され、神聖さや精神性が強調される傾向にあったのである。キリスト教道徳に基づく「愛」が導入されたことで相思相愛が理想とみなされ、一生相手と添い遂げることが望まれた。こうして親が決める「脅迫結婚」に対する「自由結婚(恋愛結婚)」を賛美する価値観が誕生し、近代家族の形成が進んだ。

明治二十二年(一八八九)に大日本帝国憲法が制定され、翌年の教育勅語では、「父母ニ孝ニ、兄弟ニ友ニ、夫婦相和シ」という家族道徳が説かれた。明治三十一年(一八九八)には、戸籍法によって妾制度が無くなったこともあり、(制度上は)一夫一妻制が成立したといえる。同年には民法で家制度が制定されている。家の統率者である戸主は原則として男性であり、扶養義務を負う代わりに家族に対して強い権限を持つことになった。そしてこの制度は天皇を父的存在として頂点に据えた疑似家族的な国家体制を作る礎となる。このようにして絶対天皇制下で男性優位の家父長制は強化されていく。

この流れの中で、「夫婦相和シ」は二重の意味を持たされたと末木文美士氏は言う。「夫

婦の和合」とは「一方で輸入されたプロテスタント的な理念であるとともに、もう一方では教育勅語的な道徳再編の基礎として組み込まれる。前者の立場からすれば、男女は平等であるべきであるが、後者の立場からすれば、男性の優位は明白である。同じように近代の倫理を構成するものでありながら、男女の平等と家父長制の強化という正反対の方向に向かうものが重層しているのである」(注25)。理想と現実の決定的な矛盾が存在するこの状況下では、「愛」をキーワードとした男女はかえって苦しむことになった。例えばそれは、『不如帰』(一九九〇)の浪子と武男が家制度のしがらみによって引き裂かれる姿に表れているだろう。理想の上では男女対等の恋愛を求めながら、実質的には「家」の論理に縛られざるを得ない。国家制度の下で家庭生活を営むときに、「愛」は絶対に必要不可欠なものであるとは言えなかったからだろう。新しい「愛」の理念はまだ生活実態になじまなかった。

日清日露戦争を経て、女性たちの性が二つに引き裂かれていたことはよく知られている。国家の軍隊と結びついた公娼制度を軸とする「男に享楽を与える性」と、良妻賢母思想主義思想が強化される中で、富国強兵のために子供を産み育てる母としての役割を振り当てられた「産む性」の二つである。「つまり、公娼制度を軸とした売春と、専業主婦の再生産労働が、男性中心主義的な経済システムと同時に国家システムにおいても、不可欠な女性の性的分業として構造化されたのが、『明暗』の時代であったのだ」と、小森氏が解説している(注26)。「男性中心主義的な経済システム」とは、いわゆる「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業のことを指している。このような構造に対して何ら疑問を持たず、または不満を持っていたとしても、そういうものであるから仕方ないと、妻として、母としての役割を受け入れることが出来た女性は一般的な意味では幸せであったといえる。それがごく一般的な立場であり、多数派であったからだ。男が女を養うという経済システムが不動のものである以上、多数派の社会規範に従うことで生活は守られる。『明暗』ではその多数派の代表として津田の妹お秀がいる。「道楽もの」の堀に「器量望み」で貰われ、すぐに「妻としての興味を夫から離して、母らしい輝いた始めての眼を、新らしく生れた子供の上に注ぐ。「心は四年以来何時でも母」だという彼女は、母としての役割に徹すること、夫の放蕩にあまり執着しないでいられる。愛の無い結婚だとしても矛盾をあまり感じないのは、夫が「金に不自由のない」身分だからこそでもある。

しかしこの性別役割分業に違和感を覚え、その構造に組み込まれまいとして強く抵抗する女性たちが現れた。女性解放運動の中心となっていた平塚らいてうや伊藤野枝を始めとする「新しい女」たちである。明治末期から大正期にかけて、スウェーデンの女性解放論者エレン・ケイの著作『Lifsinger (生命線)』(英訳: Love and Marriage)をめぐる恋愛と結婚形式(性的関係)の議論が盛んになった。らいてうや野枝による訳書『恋愛と結婚』が発表されると、そこでの「人格」を高める両性の「自由恋愛」の提唱や、「一夫一婦制を性的道徳唯一の標準、若しくは個人恋愛を、唯一の正しき形式」とする制度への批判に対してさまざまな議論が起ったという(注27)。そして大正三年(一九一四)から彼

女たちの間で繰り広げられていた「貞操論争」「墮胎論争」「廃娼論争」という性愛に関する赤裸々な議論は、同時代のジャーナリズムの注目を集めた。この議論はちょうど『明暗』が連載されていた大正五年（一九一六）においても継続されている。津田が友達と交わしたという「性と愛という問題」についての議論（十七）もおそらくこの流れを汲んでいるし、「雑誌に発表された諸家の恋愛観を読んだお秀の質問」から始まる、お延とお秀の「愛」の論争（百二十六〜百三十）は明らかに貞操論争を背景としている。

時を同じくして、資本主義経済の発展とともに、都市部においては家父長制的大家族の解体が進む。その過程に関して水田宗子氏は次のような卓見を示している（注28）。

家父長制文化は男が女を家族の中に母・妻・娘として位置づけ、女を血縁化するこ  
とを通して、女の他者性を封じ込め、その自我や内面に直面することを避けて成り立  
ってきた。そして、自分の妻であり子の母である女を、自分の一部であり所有物であ  
ると信じてきた男たちが、妻は自分とは異なる自我と欲望を持つ他者であることを知  
って愕然とし、狼狽する物語が、近代文学のテクストのコア（核）を形づくったので  
ある。

従来の村落共同体から離れて生活を営む都市生活者層が拡大していくと、そこには〈個〉の問題が提出されることになる。そして漱石が描こうとしてきたものとは、そのような〈個〉と〈個〉の関係としての男女であり、まさに女が「自分とは異なる自我と欲望を持つ他者であることを知って愕然とし、狼狽する物語」だった。

漱石作品の女性像の原型は『草枕』の那美さんに始まり、『虞美人草』で男女の物語が本格的に開幕する。漱石は男にとつての理解不能な他者として、「無意識の偽善者」、美禰子を『三四郎』で登場させた。彼女は男たちの理解を待たずして去り、そこに恋愛の成立はなかった。『それから』では抗うことの出来ない愛に翻弄され、掟に背いて社会から押し出される男女を、そして『門』ではそのような愛で結びついて結婚した夫婦を描いた。しかし「一つの有機体」のはずであった夫婦は過去の罪に脅かされる。続く『彼岸過迄』『行人』『こゝろ』では、結婚という制度と恋愛の狭間で、嫉妬に苦しむ男たちが自らの我執と対峙する。過去の罪悪に自我が脅かされるという点では『こゝろ』は『門』の変奏とも言えよう。『行人』では、いくら考えても所有しているはずの「他の心」が分からないが故に信じられない、女の「霊も魂も所謂スピリットも攫まない」という意識のために孤独に追い込まれていく男の様が克明に記される。女を結婚という制度で妻として所有することはできても「物件ぢやない人間だから、心迄所有することは誰にも出来ない」（『それから』）のである。ここで、妻など所詮わからないものである、と謎をそのままにして触れずにおくことも出来るのが結婚という制度なのだが、なまじ近代の「愛」の理念に触れて相思相愛という規範意識を獲得してしまった男たちは女の内面という謎を放っておくことが出来



ない。おそらく漱石自身もそのような男であったのだろう。漱石の女性観、男性観は『彼岸過迄』の須永が語る「恐れない女と恐れる男」という言葉によく表れている。男が恐れたのは何か、それは女の余りある純粹で美しい感情の塊を受け止めなくてはならないことである。そしてその、女の「天真」を、夫としての自分のせいで損ねてしまうことである。『行人』の一郎は「何んな人の所へ行かうと、嫁に行けば、女は夫のために邪になるのだ。さういふ僕が既に僕の妻を何の位悪くしたか分からない」と言う。妻として居直ってしまった「測るべからざる女性の強さ」をもまた恐れるのである。これを既に悟ってしまった。いる須永は千代子との結婚に踏み切れず、一郎が気付いた時にはもう手遅れであった。しかもその認識を手に入れたところでお直との関係に幸福は訪れない。佐藤泰正氏は「何んな人の所へ行かうと」とは、すでに個人の問題を超えた（制度としての結婚）そのものへの問い」だとした（注29）。この時代の男性中心原理への問題意識を漱石が抱えており、自らもそこから抜け出せずにいながらも挑み続けてきたことが窺える。

「所有」をキーワードに漱石作品の男女の愛を読み解いた末木氏は、『それから』から『こゝろ』まで、漱石は他者との関わりという問題をできるだけ抽象化して、夫婦という次元に局限化し、しかもそれを男（夫）の側からシュミレーションするという実験的な方法を採用した。それによって、他者への志向は他者に対する所有の不可能という形で、自己に屈折する孤独が明らかにされた」と指摘した（注30）。このように、ここまで提出されてきた立場は基本的に男からの一方的なものであった。しかし他者を志向するのは男だけなのか。果たして恐れているのは男だけなのか。『道草』ではその一方的な関係に新たな発展のきざしが見える。これまでの作品でも背景的に用いられていた金銭問題が表面化し、それによってより具体的な人間関係が浮き彫りとなる。そしてその中では夫婦の関係も一方的なものでなく、男の身勝手さと、それに対する女の批判が明白に打ち出された。

彼女は考へなかつた。けれども考へた結果を野性的によく感じてゐた。

「単に夫といふ名前が付いてゐるからと云ふだけの意味で、其人を尊敬しなくてはならないと強ひられても自分には出来ない。もし尊敬を受けたければ、受けられる丈の実質を有つた人間になつて自分の前に出て来るが好い。夫といふ肩書などは無くつても構はないから」

不思議にも学問をした健三の方は此点に於て却つて旧式であつた。自分は自分の為に生きて行かなければならないといふ主義を実現したがりがら、夫の為にのみ存在する妻を最初から仮定して憚らなかつた。

「あらゆる意味から見て、妻は夫に従属すべきものだ」

二人が衝突する大根は此処にあつた。

夫と独立した自己の存在を主張しやうとする細君を見ると健三はすぐ不快を感じた。

健三自身は自己本位に生きようとしながら妻のお住にはそれを許そうとしない。男性優位の意識が染み付いており反省もしない。対するお住は夫とは対照的に生活に基づく直感で男の卑怯さを批判する。『彼岸過迄』の千代子も須永を「徳義的に卑怯」だと糾弾するが事実の指摘に留まっている。お住は漱石がこれまでも描いてきた「新しい女」「恐れない女」の系譜に属しているが、はじめて男の論理を真っ向からはつきりと批判する。ただしお住は「野性的によく感じて」いるだけで、その論理は論理として成立してはいない。「妻は夫に従属すべき」という所有の要求をはねのけて、お住は子供を所有する母としての強さによって夫に対抗することになる。

こうして男女というテーマに主眼を据えて漱石作品を見渡したとき、我々はそれまでとは決定的に違う何かを『明暗』という小説に感じざるを得ない。『道草』を経て女は〈個〉としての存在感を増したものの、女の視点でその内面が語られることはほとんど無かった。『明暗』の新しいさとは何か、それは紛れもなく、確固たる意思を持った女たちが自由に活動し、その内面をあらわにするところにある。島田雅彦氏はこの点について『明暗』の女性たちは主人公や他の男性登場人物、そして語り手による解釈から解放され、男の意識に反映された女性像としてではなく、文字通り、女として行動し、意見も言う」と評した(注31)。特に主人公津田の妻、お延は極めて鮮やかな存在感を示す。これまでに登場してきた女たちは、愛されることを求めた美禰子や千代子にせよ、夫からの所有の要求に冷淡に応えるお直やお住にせよ、男のエゴや自分の立ち位置に関する一種の諦めをもって男たちに拒絶の一撃を与えてきたように思う。そして『明暗』においては津田に見切りをつけて去った清子がそうだ。対してお延はというと、結婚した後も結婚前と同じような、いやそれ以上の愛を津田に求める。いくら知識人の間で恋愛結婚が流行したとはいえ結婚後の家庭で求められたのは安定した日常であり、妻らしく振る舞うことであった。そのため、お延が夫婦生活に持ち込んだ過剰な愛の欲求は容易に満たされることは無い。しかしそれでも自分の信念に基づいて「絶対の愛」を獲得しようとするお延が示したのは、男という他者を志向する女がいかに関係を結ぶかという問題である。漱石は男性側の「所有」の論理に対して、ついに女性側から反論として「愛」の論理を打ち出した。そこに津田とお延の「愛の戦争」は勃発したのであった。次章ではこの夫婦の「愛の戦争」がいかなる様相を呈しているかを主にお延の側から考えていくこととする。

### 第三章 お延のプライド

夫婦関係について考察するにあたって、まずは『明暗』における結婚観を確認する。どうやら津田とお延の考え方は周囲の人々と必ずしも一致しないようである。

津田は叔父藤井の家で、友人小林の妹お金さんが口を利いたこともない男と結婚すると知り、「それでよく結婚が成立するもんだな」「一体結婚を、そう容易く考えて構わないも

のか知ら。僕には何だか不真面目な様な気がして不可いがな」と、恋愛のない結婚に疑問を投げかける。叔母は「全く見ず知らずのものが」結婚しても「不縁になるとも限らない」し、「いくら此人ならばと思ひ込んで出来た夫婦でも、未始終和合するとは限らない」のだと自分の見てきた世の中を説明するが、納得しない津田に対して「色々選り好みをした揚句、お嫁さんを貰った後でも、まだ選り好みをして落ち付かずにある人よりも、此方のほうが何の位真面目だか解りやしない」と、暗に清子のことを持ち出して皮肉を言う。叔母に言わせれば津田は「心が派手で贅沢に出来上つてる」から「自然真面目さが足りない人のやうに見える」のである。叔父は、男女についての「一種の哲学」を講釈し始めるのだが、そこには家父長制的な「所有」の論理がよく表れている。

「ちや若いもの丈に教へてやる。由雄も小林も参考のために能く聴いとくが可い。一体お前達は他の娘を何だと思ふ」

「女だと思つてます」

津田は交ぜ返し半分わざと返事をした。

「さうだらう。たゞ女だと思ふ丈で、娘とは思はないんだらう。それが己達とは大違ひだて。己達は父母から独立したたゞの女として他人の娘を眺めた事が未だ曾てない。だから何処のお嬢さんを拝見しても、そのお嬢さんには、父母という所有者がちやんと食つ付ひてるんだと始めから觀念してゐる。だからいくら惚れたくつても惚れられなくなる義理じやないか。何故と云つて御覧、惚れるとか愛し合ふとかいふのは、つまり相手を此方が所有してしまふといふ意味だらう。既に所有権の付いてるものに出すのは泥棒ぢやないか。さういふ訳で義理堅い昔の男は決して惚れなかつたね。尤も女は慥かに惚れたよ。(後略)」

(三十一)

つまり結婚というのは女の「所有権」を譲り受けるための手続きだといえる。このような意識を強く持っている「義理堅い昔の男」である叔父、さらに恋愛結婚を「楽な身分の人の云ひ草」だと言ひ、娘たちの結婚資金の捻出に頭を悩ます卑近な生活者である叔母、彼らの結婚観が、近代的恋愛の概念を有する津田とは噛み合わないのも当然である。

お延もまた、津田と同様に恋愛結婚をよしとする価値観を持ち、同じような疑問を抱えている。小泉氏は津田とお延の共通点に着目して以下のように指摘した(注32)。

「派手」好きや自己を尊しとする「虚栄心」(「意地」)等により、実は共通の土俵を持つ存在であり、何より恋愛を通じての結婚という道を歩んだ(近代)的モラルの遵奉者であるという点で、他の作中人物に比し、堅い(関係)の絆で結ばれた存在であるという自明の事実を無視することは許されまいだらう。

二人はよく似ている。ただしお延の「愛」の理想は津田よりもはるかに高く、彼のよう  
にぼんやりした問題意識に留まらない。これが彼らの間に齟齬をきたすのである。次の引  
用は、お延が叔父の岡本の家に行った時に、従妹の継子のお見合いについて思案する場面  
である。

さういふ二人が漫然として結び付いた時に、夫婦らしい関係が、果して両者の間に  
成立し得るものかといふのが、お延の胸に横はる深い疑問であつた。「自分の結婚です  
ら斯うだのに」といふ論理がすぐ彼女の頭に閃めいた。「自分の結婚だつて畢竟は似た  
り寄つたりなんだから」といふ風に、此場合を眺める事の出来なかつた彼女は、一直  
線に自分の眼を付けた方ばかり見た。馬鹿らしいよりも恐ろしい氣になつた。なんと  
いふ気楽な人だらうとも思つた。

(六十五)

恋愛の結果としての自分の結婚ですら順調だとは言ひ難いのに、相手をよく知らないま  
ま結婚する二人が夫婦らしくなれるのだろうか、そんなはずはない。自分が主体的に掴ん  
だ愛ある結婚が、他人に設定された愛なき結婚に劣るわけではない、というお延の自負がこ  
こに表れている。ただしそれは実際の成功に基づく自負ではなく、信念に忠実であるがゆ  
えの反骨的な自負である。

男が女を得て成仏する通りに、女も男を得て成仏する。然しそれは結婚前の善男善  
女に限られた真理である。一度夫婦関係が成立するや否や、真理は急に寝返りを打つ  
て、今迄とは正反対の事実を我々の眼の前に突き付ける。即ち男は女から離れなけれ  
ば成仏できなくなる。女も男から離れなければ成仏し悪くなる。今迄の牽引力が忽ち  
反撥性に変化する。さうして昔から云ひ習はして来た通り、男はやつぱり男同志、女  
は何うしても女同志といふ諺を永久に認めたくなる。つまり人間が陰陽和合の実を挙  
げるのは、やがて来るべき陰陽不和の理を悟るために過ぎない。

(七十六)

「自分と別物なら、何うしたつて一所になれつこないぢやないか」と、叔父は結婚前後  
の男女の変化について常識論を語る。お延は「叔父のいふ通りを信ずる気にはなれなかつ  
た。又何うあつても信ずるのは厭であつた」。なぜならそれを肯定するということは自分た  
ち夫婦が「陰陽不和」の状態にあると外部に対して認めてしまうことと同義であり、その  
とき「他人の前に、何一つ不足の無い夫を持つた妻としての自分を示さなければならぬ」とい  
うお延の決心は意味をなさなくなるからだ。しかしすでに結婚後の「陰陽不和」を自  
覚しているお延は、「あたし達のは本当の和合なのよ」と眼に涙を溜めて弱々しく抵抗する  
ことしかできない。津田とお延は基本的には同じ結婚観を持っているはずなのに彼らの関  
係はどうにもうまくいかない。恋愛結婚は夫婦に幸福をもたらすものではなかつたのだろ

うか。この理想と現実の矛盾は「愛」に絶対の信仰を置くお延にとってぜひとも解決しなければならぬ問題であった。

ところで叔父の話が本当ならば、なぜ世の中の夫婦は夫婦たりえているのだろうか。ここで夫婦一般の代表としてお秀のことを思い出してみよう。「家庭」の安定とは、夫に失望したお秀が自分を〈妻〉から〈母〉へと変貌させたように、それがいかに欺瞞に満ちたものに見えようとも、男が〈夫〉や〈父〉の、女が〈妻〉や〈母〉の役割に自己を封じ込めること、それ「らしく」なることによつて、とりあえずは得られるものに違いない」と述べたのは石原氏である(注33)。すなわち「陰陽不和」を感じたとしても、家庭内での「役割」にそれ「らしく」同化することによつて、かりそめの「陰陽和合」を実現するということだ。それが可能ながまさしく〈制度〉としての結婚の特性である。お秀や、藤井の叔母や、岡本の叔母は〈家庭〉に相応しく順応できるが、それに対してお延は「性の感じ」を奪う場としての〈家庭〉に強い拒否反応を抱いている。彼女は叔父夫婦と自分たちを比較して「智恵と想像で解けない一種の疑問」にかられる。

自分達も長の月日さへ踏んで行けば、斯うなるのが順当なのだらうか、(中略)然し未来の自分も、此叔母のやうに膏氣が抜けて行くだらうとは考へられなかつた。もしそれが自分の未来に横たはる必然の運命だとすれば、何時迄も現在の光沢（きら）を持ち続けて行かうとする彼女は、何時か一度悲しい此打撃を受けなければならなかつた。女らしい所がなくなつて仕舞つたのに、まだ女として此世の中に生存するのは、真に恐ろしい存在であるとしか若い彼女には見えなかつた。

(六十)

いつまでも女らしくありたいという内的欲求に対し、「世間」に規定された〈家庭〉は妻らしくあれという倫理を突き付ける。この内外から要求される二つの「らしく」の倫理はお延を二つに分断してしまつてゐる。「内側と外側がまだ一致しないのね。上部はたいへん鄭重で、お腹の中は確かりし過ぎる位確かりしてゐるんだから」とお延を評する吉川夫人はこの点を鋭く見抜いている。この一致は通常「役割」という外部に内面を変質させることで成立する。家事労働を「主婦として何時も遣る通りの義務」だと認識するお延の日常生活の過ごし方は模範的で、あるべき〈家庭〉の姿に馴染むように見える。しかしお延はそれを夫に対する「親切」だと意識的に捉え、それに対して夫が同じだけの「親切」で返してくれないことを不満に思つてしまう。いわばギブアンドテイクの利害関係を構築しようとしてしまつたのである。「世間」や夫に対して精一杯妻らしくあろうと振る舞うも、根本には女らしくありたい、女として愛されたいという自我の欲求があることで、お延の行動には〈妻〉としての「自然」ではなく〈女〉としての「技巧」が表面化する。津田は「技巧」に息苦しさを感じており、他者の「技巧」よりも「自然」を好む彼にとつて〈家庭〉は安息の場ではなくなつてしまふのである。しかしそのような津田もまた「技巧」を好ん

で用いる男である。さらに「嘘吐な自分を肯がう男」、「他人の嘘をも根本的に認定する男」でもある。ただしその「漠然とした人生観の下に生きて来ながら、自分ではそれを知らなかった」のだ。

岡本から帰ったお延は「ざわざわした散漫な不安」を解消するために京都の実家に手紙を書いた。そこで「自分と津田との間柄が、果して何んな所に何ういふ風に関係してゐるか」を「前後両様の比較」から考え、ようやく「自分を苦しめる不安の大根に辿り付いた」が、「其大根の正体は何うしても分らなかつた」。お延は「大根」の外見を以下のように認識することは出来たが、その正体を理解することはまだ出来ない。

津田と一所になつてから、臆気ながら次第々々に明るくなりつゝあるやうに感ぜられる其変化は、非常に見分けにくい色調の階段をそり／＼と動いて行く微妙なものであつた。何んな鋭敏な観察者が外部から覗いても到底判りこない性質のものであつた。さうしてそれが彼女の秘密であつた。愛する人が自分から離れて行かうとする毫釐の変化、もしくは前から離れてゐたのだといふ悲しい事実を、今になつてそろ／＼認め始めたといふ心持の変化。それが何で小林如きものに知れよう。(八十三)

その「大根」の正体とは、いわばその事実が起きた原因のことである。そもそもは津田が未だに清子に未練を持っていることが原因なのだが、それに加えてお延自身も一因となつている。女としての自分を誇る自尊心、直覚・智恵・手腕といった「自己の天分」への自信、「世間」に対する虚栄心、そういったお延の Pride が、我知らず津田を自分から遠ざけてしまうのである。正体が分からないということは、お延はまだそのことに気が付けないということなのである。

お延の恐れとは、津田の心が自分から離れてしまうこと、変化してしまうことである。そしてお延は、最愛の夫である津田の心変わりの結果、これまで作り上げてきた「世間」に対する「自己の像」が失われてしまうことも強く恐れている。おそらくお延にとつてのこの「世間」とはふたつに分かれているのではないだろうか。ひとつは吉川夫人やお秀なish津田側の親類など、そしてもうひとつは自分のアイデンティティーが培われた場である岡本家。お延にとって特に重要なのはこの岡本家での「自己の像」である。石原氏は、お延の行動は「岡本家で過ごした日々の自己のアイデンティティーをかたく守り通すために」つまり「他者に結ぶ自己の像を統一的に保つために、津田との関係においては自己を徹底的に改造するという二律背反」だと述べたがまさしくその通りであろう(注34)。

しかしここで注意しておかなくてはならないのは、「世間」への強い意識それ自体が津田を愛した最初の理由になつていてはならないということだ。お延と津田の出会い(七十九)を思い返してみると、お延は津田の「親切」に惹かれたことがわかる。金や社会的地位を最初に愛したのではない。そういった要素は「愛」を強化する二次的要素である。彼女はまず津田の「人格」に値する部分を愛したのである。私は、お延の「愛」を単なる

エゴイズムの発露に過ぎない、と一蹴してしまうのはいかがなものかと思う。お延の津田への「愛」は、確かに利己的で我執にまみれたものかもしれない。しかしその核となつてゐるのは紛れもなく「至純至精の感情」なのである。だからこそ津田にも同じだけの質量を持つた「絶対の愛」を求めてしまうのである。お延は変わつてしまふ前の津田を振り返つてこう考える。

お延の眼には其時の彼がちら／＼した。その時の彼は今の彼と別人ではなかつた。といつて、今の彼と同人でもなかつた。平たく云へば、同じ人が變つたのであつた。最初無関心に見えた彼は、段々自分の方に牽き付けられるやうに變つて来た。一旦牽き付けられた彼は、また次第に自分から離れるやうに變つて行くのではなからうか。彼女の疑は殆ど彼女の事実であつた。彼女は其疑を拭ひ去るために、其事実を引ッ繰り返さなければならなかつた。

(七十九)

理想と現実の矛盾を解消して幸福になるためには、「自分の斯うと思ひ込んだ人を飽くまで愛する事によつて、其人に飽迄自分を愛させなければ已まない」という信念にかけて、津田からの「絶対の愛」を獲得する必要があるとお延は改めて決心した。持ち得る限りの手腕を尽くして津田に愛されようとする彼女の行動原理は全てここに起因する。

#### 第四章 愛と憐れみ

第三章ではお延の自尊心が「愛」の成否にどのように関わるかを考え、お延の恐れを明らかにして来た。お延の掲げる「愛」の論理の弱点は、彼女一人では成り立たないことである。つまり津田が答えようとしなければ全ての努力は水の泡だということである。果たしてお延は津田の「愛」を獲得することが出来るのだろうか。第四章で考えるのは、お延の「愛」の攻撃に津田はどう応戦していくのかということである。

##### 一、金銭をめぐる

津田がどのような男なのか確認していく際、まず念頭に置くべきは金銭問題である。なぜならそこに津田の矜持と見栄が現れてくるからである。

津田は父の友人である吉川の会社に勤務する会社員である。父は元官吏で、十年前に実業界に入り、津田とは離れて京都で暮らしている。富裕ではないものの金に困るような身分ではなく、津田は結婚後の家計の不足を毎月補ってもらつてゐる。しかし「勤儉一方の父」は元々津田の無心に乗り気で応じたわけではなく、そのうえ「盆暮の賞与でその何分かを返済するという条件」を「色々の事情」のため履行しなかつた津田に対して既に気分を害していた。

「色々の事情」とは何だったのか。それを突き止めたのは父に同情する妹のお秀だった。お秀は「津田の財力には不相応と見える位立派な指輪がお延の指に輝き始めた」ことに気付き、盆の賞与でその指輪を買ってもらったことをお延から聞き出した。「津田と父との約束を丸で知らなかった」お延は、「自分が何の位津田に愛されてゐるか」を「世間」に示すために「有の儘を」話したのである。しかし悪いことに普段からお延を「派手過ぎる女」としてマイナス評価しているお秀は、「お延が盆暮の約束を承知してゐる癖に、わざと夫を唆のかして、返される金を返さないやうにさせたのだ」という誤解をそのまま京都に報告し、事態をややこしくしてしまった。それを知った父はついに何かと理由をつけて送金を中断した。父からの補助が止まったばかりでなく丁度痔の手術のための入院費も必要になったことで、金銭をめぐって物語が進行することになる。

津田は補填してもらった資金を一部返済するという約束をお延に故意に隠していた。なぜなら裕福な岡本の家庭に育ったお延は「財力に重きを置く」女であり、津田はこの点において彼女に軽蔑されることを恐れていたからである。富という「黄金の光りから愛其物が生れると迄信ずる事の出来る」津田は、彼女と結婚するからには「何うかしてお延の手前を取り繕はなければならないといふ不安」を抱いていた。この虚栄心から「自分を成る可く高くお延から評価させるために、父の財産を實際より遙か余計な額に見積つた所を、彼女に向つて吹聴」した結果、津田はこのような事態を招いてしまったのだ。

また、津田が「お延を大事にする」のにはもう一つ理由がある。それは自分の将来への布石としての意味をもつ。『大正文化』（注35）によれば「明治の学生が官吏志望にかたむいたのに対して、大正初期の青年達は、しだいに実業界に立身出世の道を求めるようになった」という。「利害の論理に抜目のない機敏さを誇り」、実業に従事して富と地位を重視する津田も、そのような青年たちの一人である。彼の理屈の上では、「お延を鄭寧に取扱う」ということは「岡本家の機嫌を取るのと同じ事」であり、「岡本と吉川が兄弟同様に親しい間柄である以上、彼の未来は、お延を大事にすればする程確かになって来る」のであった。小森氏はこの点について、「津田の感覚は、人間をめぐるすべてを金銭によって表象しうる交換価値、すなわち価格化してとらえる資本主義の論理に刺し貫かれていたのである」と指摘した（注36）。お延の指輪は、「愛」さえお金に換算できると考えてしまう津田の論理を象徴している。津田は、お延の「世間」に対する「愛」の虚栄心を金銭的価値のある指輪で埋めることで、自分の「お延」に対する「金」の虚栄心を満たしたのである（注37）。

## 二、「眼」の輝き

この小説では〈軽蔑〉の眼差しが網の目を張り巡らすように行き交っている。それは自己から他者へ向けられるだけでなく、時には「眼が覚めると共に跳ね起きなかつた自分を、何うしても怠けものとして軽蔑しない訳に行かなかつた」というお延のように自身自身へと向けられることもある。そして上記のように語り手による心情説明として表される



パターンとは別に、言語化して何度も繰り返す主張してしまうのが小林という存在だ。津田に対し「君は斯ういふ人間を軽蔑してゐるね。同情に値しないものとして、始めから見縊つてゐるんだ」、「実を云うと、君が僕を軽蔑してゐる通りに、僕も君を軽蔑してゐるんだ」と宣言する。お延には、自分は「世の中から無籍者扱ひにされてゐる」という自覚があるため、「左うでもしなければ苦しくつて堪らない」ので「わざ／＼人の厭がるやうな事を云つたり為したりする」のだとのたまう。そうやって人に嫌われようと行動する小林は、「誰からも愛されたい、又誰からでも愛されるやうに仕向けて行きたい」という考えのお延とは真逆である。この理解できない気味の悪い存在を前にしたお延は「反抗、畏怖、軽蔑、不審、馬鹿らしさ、嫌悪、好奇心」を感じる。小林は、津田、お延それぞれに内在している〈軽蔑〉を暴く装置だとも言えよう。

そして実は、このように浮き彫りにされた〈軽蔑〉は、津田とお延の夫婦関係においても重要なフアクターとなつてゐる。なぜならば津田はお延に軽蔑されることを恐れ、そしてまた、彼女を見下してもいたからである。結婚後の二人の間に起きた「愛の戦争」とは「財力に関する妙な暗闘」でもあり、お互いのプライドの戦いでもあつた。そして、お延が切望する津田からの「愛」が成り立ち得るか否かは〈軽蔑〉の問題を乗り越えた先にあるのだ。

さて、前項で津田個人の事情を確認してきたわけだが、実際津田はお延と顔を合わせた時どのような状況に陥るのだろうか。まず津田が日常生活の中でお延からどのような印象を受けているのかということを見ていきたいと思う。

細君は色の白い女であつた。その所為で形の好い彼女の眉が一際引立つて見えた。彼女はまた癖のやうに能く其眉を動かした。惜い事に彼女の眼は細過ぎた。御負に愛嬌の無い一重瞼であつた。けれども其一重瞼の中に輝やく瞳子は漆黒であつた。だから非常に能く働らいた。或時は専横と云つてもいゝ位に表情を恣まゝにした。津田は我知らず此小さい眼から出る光に牽き付けられる事があつた。さうして又突然何の原因もなしに其光から跳ね返される事もないではなかつた。

(四)

津田はどうやらお延の「眼」に強い印象を持つてゐるようだ。彼は「刹那的に彼女の眼に宿る一種の怪しい力」、「妙な輝き」を感じ、「此眼付の為に」彼女への返答を遮られた。石原氏は「隠す『明暗』／＼暴く『明暗』」において『明暗』を「眼」の小説だと評した。この「眼」は、「誘惑し、あるいは拒否する」。医者から帰宅した津田を待ち受けていたのはお延との「あまりにも熾烈な「眼」の戦い」であつた(注38)。お延は津田の到着をしつかり「見てゐた」が、それに気付かないふりをして額に手を翳し何かを見上げる態度をとつた。そして近づいて声をかけた津田の方を「左も驚いた様に急に」振り向き、同時に「自分の有つてゐるあらゆる目の輝きを集めて一度に夫の上に注ぎ掛けた」。そのとき「半ば細君の嬌態に応じやうとした津田は半ば逡巡して立ち留ま」らなくてはならなかつた(三)。

ここでお延がしていることは「自然」に見えるように演技をする「技巧」である。津田はその「技巧」に気付いている。ただ、お延は故意にわざとらしく演じていたのか、あるいは本当に「自然」体を装おうとしたのかは怪しいところであり、もしかすると、津田に自分の「親切」を意識させるために分かりやすい「技巧」を演じた可能性も捨てきれない。結婚後津田は「日常瑣末の事件のうちに」発揮されるお延の「技巧」によく驚かされ、「時々自分の眼先にちらつく洋刀の光のやうに眺め」、どこか気味の悪さを感じている。お延がよかれと考えてする行為は必ずしも津田に良い印象を与えているわけではないのだ。

「眼」に関しては、津田に向けられる清子の「眼」の「信と平和の輝き」を扱った平岡敏夫氏の論(注39)など、他にも多くの論者が触れているモチーフであり、『明暗』において「眼」が意図的に使われていることは疑いようがない。別の漱石作品でも表情の機微が「眼」で表されることがよくあるが、『彼岸過迄』の須永の独白に『明暗』と関わる興味深い叙述があったので次に引用する。

僕は常に考えている。「純粹な感情程美しいものはない。美しいもの程強いものはない」と。強いものが恐れないのは当たり前である。僕がもし千代子を妻にするとしたら、妻の眼から出る強烈な光に堪えられないだらう。その光は必ずしも怒を示すとは限らない。情の光でも、愛の光でも、若くは渴仰の光でも同じ事である。僕は屹度其光の為に射竦められるに極つている。それと同程度或はより以上の輝くものを、返礼として彼女に与えるには、感情家として僕が余りに貧弱だからである。(十二)

ここには津田とお延の「眼」の戦いの本質が言い表されている。須永と千代子の関係は、津田とお延の関係によく似ていると思う。もちろん津田は須永ほど卑屈ではないし、お延は千代子のように「愛」を諦めようとはしない。しかし「愛」に積極的な女の「眼」が放つ「強烈な光」、「純粹な感情」の奔流に圧倒されるという関係は酷似している。逆に言えば『明暗』の二人は『彼岸過迄』の二人の発展した先にいるのである。ここでは男だけでなく女も「恐れる」し、男は女の「眼」に「信と平和の輝き」という安息を求めるのだ。お延の「眼」は強烈な感情を物語る。そして「人を見抜く力」を備えてもいる。津田にとってこの「眼」は脅威である。お延の鋭い直覚によって、隠し続けている金銭に関する弱みや、そのまた奥に隠している過去の恋愛問題を「見破られる」かもしれないからだ。もし見破られてしまったら、そのときお延の「眼」には〈軽蔑〉の光が宿るだろう。それは津田のもっとも恐れるところである。これらの弱点を持っているがために、津田は「愛の戦争といふ眼で眺めた彼等の夫婦生活に於て、何時でも敗者の位置に」立つのである。

### 三、軽蔑と同情

ここでは特に津田が入院するまでの冒頭部に注目して、もう少し具体的な出来事から夫婦の状況を把握していきたい。

二人の間には時に相手を突き放すような冷淡さが漂う。例えば、芝居に行きたいという意思を否定してみたあと外出用の帯と晴着を「出して見た」お延に対する、「それで今度その服装で芝居に出掛けやうと云ふのかね」という津田の言葉には「皮肉に伴ふ或冷やかさ」が籠っている。津田には「さう御前のやうな女とばかり遊んぢやゐられない。己には己でする事があるんだから」という「相手を見縊った自覚」がぼんやりとながら働くこともあった。実際お延から見た津田にはいつでも「自制の念」に加えて「腹の奥で相手を下に見る時の冷かさ」が特色としてあつたのである。

この冷やかな態度はやはり金銭問題を前にした時によく現れるようだ。父から送金拒否の旨の手紙を受け取った時のことである。津田はその既に「開いた手紙」をお延に手渡すが、お延は「何も言わずにそれを受け取ったぎり、別に読まうともしない」のである。このような「冷やかな細君の態度」を「最初から恐れてゐた」津田は、すぐさま「父に対する非難がましい言葉」を用いて「自分と父の言訳」に打って出る。なぜなら「津田は平生からお延が自分の父を軽蔑する事を恐れてゐた」からであり、それはただちに自分の財力への、ひいてはそれを隠していた「人格」への〈軽蔑〉に繋がるということは前述した通りである。家計の不足を補うための一手として岡本に融通して貰うことを思いついた津田だったが、その一手はお延によつてあつさり退けられてしまう。「厭よ、あたし」というお延の言葉には「何の淀みも」なく、「遠慮と斟酌を通り越した其語気が津田にはあまりに不意過ぎ」、津田は「自分に同情のないお延に対して気を悪くする」暇もなく驚いた。しかし「お延が一概に津田の依頼を斥けたのは、夫に同情がないといふよりも、寧ろ岡本に対する見栄に制せられたのだ」ということが腑に落ちると、津田の「眼のうちに宿つた冷やかな光」は消えた。お延は岡本に頼む代わりに自分の着物を質に入れようか、という提案をする。それは津田にとつて「驚くべき価値のある発見」であり、「嬉しい事実」でもあつた。遣り繰り算段をお延が知っているのは金銭面での利益であるし、「大事な着物や帯」なのに「自分のために提供して呉れる」ことにはお延の自分に対する「同情」を感じるからである。しかし、それをあえてお延にさせるということは津田にとつては苦痛だった。なぜならば「細君に対して気の毒」というよりも寧ろ夫の矜りを傷けるという意味に於て彼は躊躇した」のである。この態度からはのちにお秀が「他の親切を受けることの出来ない人」つまり「他の好意に感謝することの出来ない人」だと指摘した様子がかがえる。

ただここで注目したいのは「冷やかさ」とは反対のカテゴリーに属す「同情」「気の毒」という感覚である。津田はお延に対して自分への「同情」を求めている。お延は十分すぎるほど津田に「親切」ではないか、彼はなにが不満なのだろう。それはおそらく、彼の言う「同情」というのが、お延の「親切」のように意識的な「技巧」として発現するものではなく、無意識で「自然」な感情から発現する性質のものだからである。だが「彼は向うの短所ばかりに気を奪われ」、「その裏側に自分の長所を転綴して喜ん」で、「自分の短所には決して思い及ばなかつた」。自分はお延に妻らしく夫を尊敬し寄り添うような「同情」を内心で常に望んでいるのに、自分は彼女に対して心底「気の毒」だという気にはなれない

のだ。その原因はやはり「矜り」である。

「気の毒だとも可哀相だとも思つて下さらないんです」

「気の毒だとも、可哀相だとも……」

これ丈繰り返した津田は一旦塞えた。その後で継ぎ足した文句は寧ろ蹣跚として揺めいてゐた。

「思つて下さらないつたつて。——いくら思はうと思つても。——思ふ丈の因縁があれば、いくらでも思うさ。然しなけりや仕方ないぢやないか」

お延の声は緊張のために震えた。

「あなた。あなた」

津田は黙つてゐた。

「何うぞ、あたしを安心させて下さい。助けると思つて安心させて下さい。貴方以外にあたしは憑り掛り所のない女なんですから。あなたに外されると、あたしはそれぎり倒れてしまはなければならぬ心細い女なんですから。だから何うぞ安心しろと云つて下さい。たった一口で可いから安心しろと云つて下さい」 (百四十九)

おまえを「気の毒だとも、可哀相だとも」「思ふ丈の因縁」が無い。これはお延にとつて死刑宣告と同じようなものである。「絶対の愛」など存在してはいないので、という絶望的な宣告である。けれどもその絶望に満ちたお延の口から「少しも取り繕はない至純至精の感情」が「泉のやうに流れ出し」たことは彼らに思わぬ結果をもたらした。

お互いのPrideが水面下で衝突していたことが原因で「何処迄行つても、直に向き合ふ訳に行かなかつた」二人の関係は、ここにおいて大きな意識変革を迎えることになった。それは「愛」の獲得への序章でもあつた。

波瀾の収まると共に、津田は悟つた。

「畢竟女は慰撫し易いものである」

彼は一場の風波が彼に齎した此自信を抱いてひそかに喜こんだ。今迄の彼は、お延に對すること、苦手の感を何処かに起さずにあられた事がなかつた。女だと見下ろしながら、底気味の悪い思ひをしなければならぬ場合が、日毎に現前した。それは(中略)未だ曾て他に洩らした事の無い事実と違ひなかつた。だから事実と云い条、其実は一個の秘密でもあつた。それならば何故彼がこの明白な事実をわざと秘密に附してゐたのだらう。簡単に云へば、彼はなるべく己れを尊く考へたかつたからである。愛の戦争といふ眼で眺めた彼等の夫婦生活に於て、何時でも敗者の位地に立つた彼には、彼でまた相当の慢心があつた。(中略)彼は今迄是程猛烈に、又真正面に、上手を引く様に見えて、実は偽りのない下手に出たお延といふ女を見た例がなかつた。弱点を抱いて逃げまはりながら彼は始めてお延に勝つ事が出来た。結果は明瞭であつた。

彼は漸く彼女を軽蔑する事が出来た。同時に以前よりは余計に、彼女に同情を寄せる事が出来た。

お延にはまたお延で波瀾後の変化が起こりつゝあつた。(中略) 彼女は自分の弱点を浚け出すと共に一種の報酬を得た。今迄どんなに勝ち誇つても物足りた例のなかつた夫の様子が、少し変わった。彼は自分の満足する見当に向いて一步近づいて来た。彼は明らかに妥協といふ字を使つた。其裏に彼女の根限り掘り返さうと力めた秘密の潜在する事を暗に自白した。(中略) 彼女は口惜しがると同時に喜んだ。彼女はそれ以上夫を押さなかつた。津田が彼女に対して気の毒といふ念を起したやうに、彼女もまた津田に対して気の毒といふ感じを持ち得たからである。(百五十)

お延が堪え切れず弱点をさらけ出したことによつて、津田とお延の関係はそれまでと逆転し、「已むを得ず征服されるので、心から帰服するのではなかつた」津田は、「弱点を抱いて逃げまわりながら」お延に勝利し、プライドを傷付けられることなく初めて勝者の位置に立つことができた。津田は「漸く彼女を軽蔑する事が出来た」と同時に以前よりも「彼女に同情を寄せる事が出来た」という。

ここで、なぜ真逆とも思える〈軽蔑〉と〈同情〉が同時に起こるのだろうかという疑問が生じる。この二つがかけ離れた対極の位置にあるものではなく、極めて近い場所に位置する感覚だと仮定すると、その関係は例えるならばコインの裏表、同じ物体の暗部と明部とでも言えるだろうか。そしてこの〈軽蔑〉と〈同情〉の根底に流れるものはなんなのだろうかと考えた時、私は漱石の過去の作品に遡ることになった。先に引用した『彼岸過迄』の一節の続きにはこのようにある。

恐れないのが詩人の特色で、恐れるのが哲人の運命である。彼女は僕の知つてゐる人間のうちで最も恐れない一人である、だから恐れる僕を軽蔑するのである。僕は又感情といふ自分の重みで蹴爪付きさうな彼女を、運命のアイロニーを解せざる詩人として深く憐れむのである。否時によると彼女の為に戦慄するのである。(十二)

おそらく〈軽蔑〉と〈同情〉はそれぞれこの〈憐れみ〉の発現形態である。〈憐れみ〉が暗・陰の面で表れると〈軽蔑〉となり、明・陽の面から表れると〈同情〉になる。しかもどちらにもPrideが強く結び付いている。実は漱石の作品には〈憐れみ〉についての叙述が多い。しかもそれはどれも「愛」と関連しているのである。『彼岸過迄』からぐつと遡つて『草枕』のヒロイン那美さんの「憐れ」は元の夫に思いがけず再会した時に浮かんたものだ。そして『三四郎』では「pity's akin to love」という句が象徴的に使われている(注40)。与次郎はこれを「可哀想だた惚れたつて事よ」と訳した。可哀想だとは惚れたということ、憐みは恋の始まり、恋と憐れは種一つ、など様々に訳されるが、直訳は、「憐れみは愛に似ている」だ。たしかに『三四郎』で美禰子が三四郎に向けたのは愛とは似て非な

る、未熟なものへの〈憐れみ〉であった。しかし『明暗』に至ってはどうかだろうか。漱石の〈憐れみ〉への認識は変化してきてはいないだろうか。〈憐れみ〉が「愛」へと発展する可能性を示唆してはいないだろうか。我々は、一方的にではなくお互いに〈同情〉の眼差しを送りあう津田とお延の姿の先に、「愛」の〈関係〉が再構築される微かな可能性を感じてもよいはずである。

## 第五章 おわりに

夏目漱石という作家は、自己と他者がいかに関わることができるのかという問題について苦悶しながら考え続けた作家である。他者を認識しようとするその眼は、必然的に認識する主体である自己の内部へと向けられていった。自分とは全く異なった理解不能の他者と向き合ったとき、人は人を恐れる。陰陽和合と陰陽不和を繰り返す男女のジレンマはここに発生した。そうして漱石にとって最も理解しがたい、不可知の他者とは女性であった。

これまでの漱石の小説では、恐れない女は自我を脅かす不可知の他者として恐れる男の前に立ちはだかかってきた。しかし、もしも恐れる男が恐れる女を発見したら、そのとき男女の関係はどう変わるのだろうか。何ものをも恐れない存在だと思っていた女が、実は恐れる女だったということに初めて気付いた恐れる男は、自分と同じように相手もまた恐れるを知る人間であったのだと〈同情〉する。恐れる女もまた同様にして恐れる男に〈同情〉する。そして、これによって互いの差異がよりいっそう強調され、それを比較することで各々が優劣の関係を規定し〈軽蔑〉の念を抱くのである。差異が明確になれば共通点も強調される。そしてまた共通の領域を持つものへの〈同情〉が深まっていく。〈同情〉〈軽蔑〉は〈憐れみ〉を中心にして円を描くように相互に関係している。その同化と異化のプロセスの「妥協」点を探ることは、すなわち、個別的存在である二人の人間が、それぞれの「個」(Pride)を守りつつ、日常生活を継続し、そこに「愛」を獲得するための最終手段なのではないだろうか。

- 注1 小宮豊隆『文学』岩波書店、一九三五年三月
- 注2 唐木順三『明治大正文学研究』第七卷・第八卷、東京堂、一九五二年六月・十月
- 注3 猪野謙二『明暗』における漱石―虚無よりの創造』『思潮』第八卷、出版社不明、一九四八年三月、のちに『明治の作家』岩波書店、一九六六年)
- 注4 江藤淳『夏目漱石』東京ライフ社、一九五六年
- 注5 駒尺喜美『則天去私』覚え書』『日本文学』一九六九年一月)
- 注6 平野謙『則天去私をめぐって』『近代文学鑑賞講座』第一卷、角川書店、一九五八年)
- 注7 内田道雄『明暗』小論』『古典と現代』第四卷、古典と現代の会、一九五八年六月)
- 注8 内田道雄『明暗』(『日本近代文学』第五集、日本近代文学会、一九六六年十一月)
- 注9 小泉浩一郎『津田とお延』(『国文学解釈と鑑賞』第四十六卷六号、至文堂、一九六一年六月)
- 注10 高木文雄『明暗』と『則天去私』(『漱石の道程』審美社、一九六六年)
- 注11 相原和邦『漱石文学の研究』明治書院、一九八八年
- 注12 秋山公男『漱石文学論考』桜楓社、一九八七年
- 注13 石原千秋『明暗』(研究の現在)』(『国文学解釈と教材の研究』第三十九卷二号、学燈社、一九九四年一月)
- 注14 重松泰雄『漱石は『明暗』の筆をそのあとどう続けようとしたのか』(『国文学解釈と教材の研究』第二十三卷十一号、学燈社、一九七八年九月)
- 注15 藤澤るり『出会いと沈黙―『明暗』最後半部をめぐって―』(『国語と国文学』第五十七卷九号、至文堂、一九八〇年九月)
- 注16 三好行雄『明暗』の構造』(『講座夏目漱石』第三卷、有斐閣、一九八一年)
- 注17 玉井敬之『漱石の展開』『明暗』をめぐって』(『日本文学講座』第六卷、大修館書店、一九八八年)
- 注18 大岡昇平『明暗』の結末についての試案』(『群像』第四十一卷一号、講談社、一九八六年一月)
- 注19 水村美苗『續明暗』筑摩書房、一九九〇年
- 注20 石原千秋『明暗』論―修身の〈家〉／記号の〈家〉―』(『国文学解釈と鑑賞』第五十三卷十号、至文堂、一九八八年十月)
- 注21 小森陽一『漱石深読―第十三回『明暗』』『すばる』三十二卷一号、集英社、二〇一〇年一月)
- 注22 佐々木充『明暗』論の基底』(『国語国文研究』八十五号、北海道大学国語国文学会、一九九〇年三月)
- 注23 熊坂敦子『明暗』(『国文学解釈と教材の研究』第十四卷五号、学燈社、一九六九

年四月)

- 注24 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』岩波書店、一九九八年
- 注25 末木文美士「愛―漱石のジェンダー戦略から」(末木文美士編著『思想の身体―愛の巻』春秋社、二〇〇六年)
- 注26 小森陽一「結婚をめぐる性差―『明暗』を中心に―」(『日本文学』第四十七卷十一号、日本文学協会、一九九八年十一月)
- 注27 十川信介「注解」(夏目漱石『漱石全集 第十一卷 明暗』岩波書店、一九九四年)
- 注28 水田宗子「他者性」(井上輝子ら編『岩波女性学事典』岩波書店、二〇〇二年)
- 注29 佐藤泰正「漱石の描いた女性たち―あとがきに代えて―」(佐藤泰正編『表現のなかの女性像』笠間書院、一九九四年)
- 注30 注25
- 注31 島田雅彦『漱石を書く』岩波書店、一九九三年
- 注32 注9
- 注33 石原千秋「夏目漱石『明暗』」(『国文学解釈と鑑賞』第五十八巻四号、至文堂、一九九三年四月)
- 注34 注33
- 注35 南博・社会心理学研究所『大正文化』勁草書房、一九八七年
- 注36 注21
- 注37 実は指輪を贈った理由には(おそらく清子とやりとりをした)手紙を焼く津田へお延が疑惑を抱いた事が関わっている。小森氏(注21)がこの点について以下のような推測をしている。
- 「初秋」といえば、「盆」の「賞与」が出た後。「探りを入れ」れば、このとき不審を抱いたお延をなだめるために、津田が「指輪」を買い与えたのではないかということは容易に推論することができるだろう。その「指輪」に「愛」の証を認めたからこそ、お延の記憶からは、この「初秋」の「日曜日」の朝の、手紙を焼く津田の姿は欠落させられていた。
- 注38 石原千秋「隠す『明暗』／暴く『明暗』(作品の分析)」(『国文学解釈と教材の研究』第三十九巻二号、学燈社、一九九四年一月)
- 注39 平岡敏夫『『明暗』、信と平和の輝き』(『国文学解釈と鑑賞』第五十三巻八号、至文堂、一九八八年八月)
- 注40 トマス・サザン脚本の戯曲『オルノーコ』の一句。同名原作小説の作者はアフ・ラ・ベーン。



《使用テキスト》

- 夏目漱石『漱石全集 第五卷 坑夫・三四郎』岩波書店、一九九四年  
夏目漱石『漱石全集 第七卷 彼岸過迄』岩波書店、一九九四年  
夏目漱石『漱石全集 第十卷 道草』岩波書店、一九九四年  
夏目漱石『漱石全集 第十一卷 明暗』岩波書店、一九九四年  
夏目漱石『漱石全集 第二十卷 日記・断片下』岩波書店、一九九六年  
夏目漱石『漱石全集 第二十四卷 書簡下』岩波書店、一九九七年

※本文引用は全てこれら全集による。但し、引用部の傍線、傍点は全て論者による。尚、ルビは適宜取捨選択した。

《参考文献》

〈書籍〉

- 江藤淳『決定版 夏目漱石』新潮社、一九七九年  
遠藤辰雄編『アイデンティティの心理学』ナカニシヤ出版、一九八一年  
桶谷秀昭『増補版 夏目漱石論』河出書房新社、一九八三年  
梶木剛『夏目漱石論』勁草書房、一九七六年  
柄谷行人『漱石論集成』第三文明社、一九九二年  
倉石あつ子ら編『人生儀礼事典』小学館、二〇〇〇年  
駒尺喜美『漱石―その自己本位と連帯と―』八木書店、一九七〇年  
坂本浩『夏目漱石―作品の深層世界―』明治書院、一九七九年  
実方清『夏目漱石辞典』清水弘文堂、一九七二年  
重松泰雄監修『明治大正昭和 作家研究大事典』桜楓社、一九九二年  
社会文学事典刊行会編『社会文学事典』冬至書房、二〇〇七年  
末木文美士編著『思想の身体―愛の巻』春秋社、二〇〇六年  
瀬沼茂樹『夏目漱石』東京大学出版会、一九六二年  
土居健郎『漱石の心的世界』至文堂、一九六九年  
日本近代文学館編『日本近代文学大事典』講談社、一九八四年  
比較家族史研究会編『事典 家族』弘文堂、一九九六年  
平岡敏夫ら編『夏目漱石事典』勉強出版、二〇〇〇年  
深谷昌志『良妻賢母主義の教育』黎明書房、一九六六年  
三好行雄編『鑑賞日本現代文学 第五卷 夏目漱石』角川書店、一九八四年  
三好行雄編『別冊国文学三十九 夏目漱石事典』学燈社、一九九〇年七月  
三好行雄ら編『講座 夏目漱石 第三卷（漱石の作品（下））』有斐閣、一九八一年

〈論文〉

相原和邦『漱石文学における「実質の論理」(一)―『明暗』を中心に―』『国語と国文学』第五十卷三号、至文堂、一九七三年三月)

- 荒正人 『明暗』の登場人物」(『国文学解釈と鑑賞』第二十一卷十二号、至文堂、一九五六年十二月)
- 有光隆司 「偶然」から「夢」へ―『夢十夜』変奏としての『明暗』(『国文学解釈と鑑賞』第六十六卷三号、至文堂、二〇〇一年三月)
- 石井和夫 「夏目漱石 明暗」(『近代小説研究必携―卒論・レポートを書くために―』第一卷、有精堂、一九八八年)
- 石原千秋 「夏目漱石『明暗』」(『国文学解釈と鑑賞』第五十八卷四号、至文堂、一九九三年四月)
- ヴァルドー・ヴィリエルモ／武田勝彦訳 「明暗」―お延を中心に」(『国文学解釈と教材の研究』第十五卷五号、学燈社、一九七〇年四月)
- 上野千鶴子・末木文美士 「対論 性／愛／家族」(末木文美士編著『思想の身体―愛の巻』春秋社、二〇〇六年)
- 内田道雄 『明暗』の新聞挿画にみる「男と女」(『国文学解釈と鑑賞』第五十五卷九号、至文堂、一九九〇年九月)
- 遠藤祐 『明暗』の人間関係―津田と清子を中心に―」(『国文学解釈と鑑賞』第四十六卷六号、至文堂、一九八一年六月)
- 大岡昇平 『明暗』の結末についての試案」(『群像』第四十一卷一号、講談社、一九八六年一月)
- 片岡豊 『明暗』(平岡敏夫ら編『夏目漱石事典』勉誠出版、二〇〇〇年)
- 小宮豊隆 『明暗』の材料」(『文藝春秋』第十五卷四号、文藝春秋、一九三七年四月)
- 佐藤泰正 『明暗』をどう読むか―漱石探究三―」(『日本文学研究』第四十号、梅光学院大学日本文学会、二〇〇五年一月)
- 佐藤泰正 「漱石の中の男と女(一)―『草枕』から『明暗』まで(漱石探究四)―」(『日本文学研究』第四十一号、梅光学院大学日本文学会、二〇〇六年一月)
- 重松泰雄 『明暗』―その隠れたモチーフ―」(『別冊国文学(夏目漱石必携)』第五卷九号、学燈社、一九八〇年二月)
- 永井愛・小森陽一 「対談 迷宮としての『明暗』」(『すばる』第二十七卷三号、集英社、二〇〇五年三月)
- 三好行雄 「漱石研究の現在 明暗」(『国文学解釈と教材の研究』第三十二卷六号、学燈社、一九八七年五月)